

浄土

monthly JÔDO

2019
April

4



法然上人鑽仰会

貧乏童

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



花が供えられ、皿には水が張られて
いる。地元の人たちに大事にされて
いるのがよくわかる。

写真は東京・中野区野方で見つけた庚申塔である。これまでいくつも見てきた庚申塔とは少し趣が違う。急ぎの用事の途中だったので、とりあえずスマホで写真を撮った。帰宅してから、写真を見てみる。これまで見た庚申塔とはやはりどこか違う。庚申塔に詳しい知人に写真を送って感想を求めたところ、すぐに返事がきた。彼は都内の庚申塔を数百塔撮影している。返事はこうである。

「唐破風型の笠付き角柱庚申塔。笠の形が珍しい。(略) 青面金剛の顔の部分から割れたものを補修したように見えるが、自然に割れたのではなく、明治維新後の廃仏毀釈で割られたのかもしれない。廃仏毀釈は仏教弾圧だけではなく、神道以外の民間信仰も徹底的に潰していったらしい。そのせいで青面金剛の顔も三猿の顔も削られたものが多い。しかし、なぜか邪鬼の顔を削ったものはほとんど見かけない。(略) 四天王に踏みつけられた邪鬼はみんな苦しげな表情だけど、庚申塔の邪鬼はしたたかなしぐさ、表情のものが多い。なかなかよい庚申塔だね。神社やお寺ではなく、路傍に建つ庚申塔は貴重だと思う。ここは駐車場の横のようだけど、路傍の庚申塔が建つのは駐車場横という例がけ

っこう多い」

庚申塔は中国から伝来した、道教に由来する庚申信仰に基づいて建てられた石塔のことらしいけど、と尋ねると「庚申信仰の根源は道教にあるだろうけれど、庚申講における庚申待や、庚申塔を建てるという風習はこの国独自のものでしょう。(略) 庚申待は庚申の日に眠ると体内にいる三匹の虫が抜け出して(天帝)にその人間の悪事をチクるといわれ、それで眠らずに一晚を飲み食いして過ごすのらしいけれど、(天帝)とは道教の絶対神だと思ふ。まあ、その庚申待も平安時代から続くとはいえ、江戸時代にはそれにかこつけた飲み会であつたらしい。庚申講のグループは、庚申待を十八回やると庚申塔を建てたといわれている。六〇日に一回庚申の日がめぐってくるわけだから、一〇八〇日で庚申塔を建てる。ということとは三年に一つ建てることになる。江戸時代には多くの庚申講があつたので、庚申塔がどこにもあるはずだ。庚申塔を庚申塚ともいっているのとおなじだろうと思う」との返事。

そして後日「野方を歩いてみた。三叉路に地藏堂を見つけた。そこは三叉路に地蔵堂を見つけた。三叉路、丁字路には魔物がいるというが、そこに地蔵堂、庚申塔が建っていることが多い。真言宗の寺でもひとつ見つけた」とメールがきた。おもしろい世界ではある。

世田谷区・用賀

無量寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



崇鎮山観音院無量寺本堂と
第三十一世高橋誠実住職。





本堂内陣。



かつては村の行事ともなった無量寺の十夜。この永代十夜霊位宝塔が拝まれる。

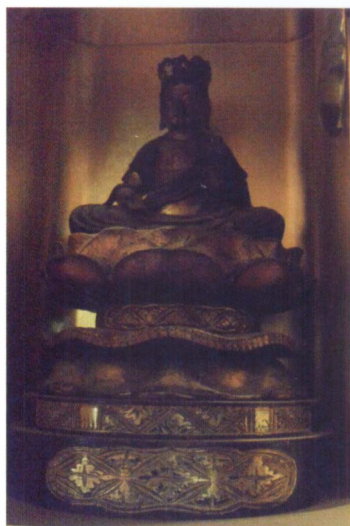


本尊の阿弥陀如来坐像。
この前の本尊が裏堂に
安置されている。

用賀観音 無量寺御詠歌
 ふだらくや むめうののりは むりょうどの
 あさなゆうなの まつかぜのおと



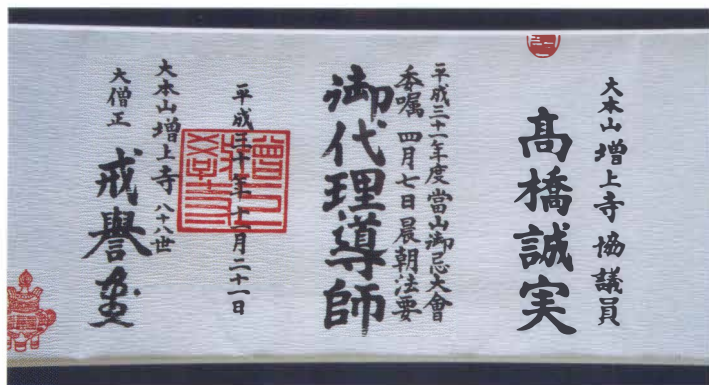
観音堂内陣。
 正面上には十一面観世音菩薩の額が
 かかっている。



観音講の家々を泊まり歩いた巡行仏。
 高さ30センチ程度の厨子に納めて
 られている。

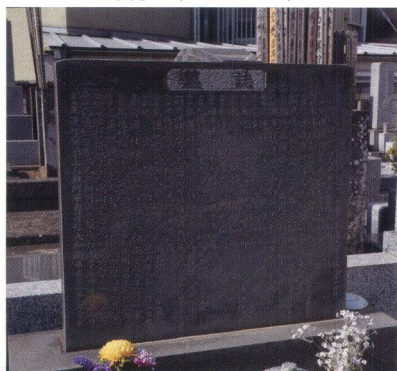


山門脇に立つ十一面観世音菩薩の石碑。



増上寺御法主台下から授与された御代理導師の委囑状。

歴代墓に立つ墓誌には伽藍建立の文字が彫られている。



無量寺には本堂を挟んで両側に二つの墓域があり、歴代墓には首からの墓地にある。



人気の東急田園都市線。用賀駅は地下になっている。



駅裏は開発が進み商業施設とオフィスビルが聳えている。

浄土

2019/4月号 目次

カラーグラビア=寺院紀行 世田谷区 用賀 無量寺	写真=真山剛	1
法然上人とお弟子たち	石丸晶子	6
寺院紀行 世田谷区 用賀 無量寺	真山 剛	12
連載 微風吹動	名和清隆	18
法然上人と親鸞聖人②⑩	林田康順	24
連載 江戸の川を歩く	森 清鑑	30
連載小説 渡辺海旭⑨⑥	前田和男	36
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	43
編集後記		44

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字=中村康隆元浄土門主

表紙写真=鬼海弘雄

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会 主催

石丸晶子氏講演概録

法然上人と

お弟子たち（四）

平成三十年六月二十二日 於増上寺慈雲閣

ではここで、法然上人の御言葉のいくつかをご紹介します。

臨終のとき門弟に示したお言葉にこういうのがあります。法然上人はいよいよ息を引き取るときになって、それまで布団の上に身を起こして、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、念仏を唱えておられました。

いよいよ息を引き取る、亡くなるとき、枕に、横になられたそうです。それで、お弟子さんたちは、いよいよ浄土に赴かれるときになって、今まで身を起こして念仏を唱えていたのに、横になって念仏を唱えるというのはどうでしょう。先生、身を起こしてくださいと言います。

そしたら法然上人はどう答えたか。よくこそ、そういうことを聞いてくれた。その訳をわたしは言おう。今、わたしが枕に横になって息を引き取る準備をするのは、もしわたしが身を起こして念仏を唱えたならば、わたしの死後、多くの門下生、浄土宗の信者たちは、命を終えるときに、それ起こせ、やれ起こせで、浄土に行くためには、息を引き取るときに身を起こして南無阿弥陀仏を唱えながらでないと、浄土に往生できないと言うであろう。

だからわたしは、身を起こすことができるけれども、あえて身を横たえて、枕に臥せて、念仏を唱えているのだ。お釈迦様も「頭北面西 右脇臥（ウキヨウガ）」の姿で、つまり、北を枕に西に体を傾けて、身を起こしてではなく枕で西に身を向けて入寂された。だから、わたしは今横になって、皆の今後のことを考えて枕に身を横たえて念仏をしているのだ、と。

それからまた、先ほども出てまいりました平家と血縁関係が強かった信空と

いうお弟子さんが、法然上人に尋ねます。いろいろな偉い、比叡山の天台宗をおこされた伝教大師にしても弘法大師にしても、皆、延暦寺、高野山というように遺跡（ユイセキ）があります。法然上人には遺跡となるところがありません。法然上人が亡くなったあと、私たちはどこを遺跡とすればいいのでしょうかと尋ねました。

法然上人は、「わたしの遺跡は至る所にある。南無阿弥陀仏の声するところがわたしの遺跡である。わたしの遺跡は神社仏閣ではない。南無阿弥陀仏の声がするところに、私は共にいる」とおっしゃいました。

それでは、弟子の中の法然上人についてお話します。

源智上人は、平家の直系です。それで身を隠して、生き残って法然上人のお弟子になった方です。

法然上人が一二二二年一月に亡くなると、同じ年の十二月二十四日に、滋賀県の玉桂寺の阿弥陀仏立像を僅か十か月そこそこで、国宝級だと思います、阿弥陀仏を像立しました。

そこに、十二メートル弱の巻物に四万六千人の名前が記された念仏の結縁者、法然上人につながる者です、という人たちが、四万六千人の名前を書き連ねたものを、源智上人が阿弥陀仏坐像にしまっておられたのが、昭和三十年代に発見されました。

そこには次のように書かれています。「法然上人から受けた御恩は多生曠劫

にも報い難い」と。

それから、親鸞聖人は終生、法然上人を慕い、現存する四十三通のお手紙の中でも信仰の重要な箇所を教えるところになると必ず、「これは私が勝手に言っていることではなく、大師法然上人の仰せでした」と記し、「親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかぶりて、信心するほかに別の仔細なきなり云々」と記して、本当に法然上人に傾倒しておられます。

私は数年前に、親鸞聖人のお手紙、四十三通を現代語に訳して自費出版しました。そのとき、どんなに親鸞聖人が法然上人に傾倒して、敬愛して敬愛して、どんなにやまないかということがすごく伝わってきました。

それから、親鸞聖人は九十歳で亡くなりますが、八十五歳を過ぎてからの仕事は、ひたすら法然上人の教えを再確認することに投入されます。

長男の善鸞にそむかれたあと、八十五歳になった親鸞聖人は、目もしよほしよほして、行灯の灯りか、ロウソクの灯りでしよう、乏しい灯りの中で、目もしよほしよほしてよく見えないと言いながら、法然上人のお手紙をまとめ、そのみ教えを繰り返し繰り返し、確認する仕事に、晩年の五十六年を投入されます。どんなに親鸞聖人が法然上人を熱愛し、敬愛しておられたかがわかります。

私は、親鸞聖人という方は、「比類なき宗教思想家」であつたと思います。それに対して法然上人は「比類なき宗教者」であつたと思います。

一一七五年の比叡山での実存覚醒以後、一二二二年に亡くなるまでの間の

日々、一歩ずつ、一日一日のその回心を再確認、再発見する日々であったと私は思います。

専修念仏を誤って理解して、南無阿弥陀仏を一回唱えれば、あとは人殺しをしようが泥棒しようが勝手次第なんて、とんでもない。そういう一念義を教える人たちに対する断固とした厳しさ。

それから、人間心理と人間生活万般に通じた方で、非常に驚かされます。法然上人のお手紙を以前、現代語訳して出版しましたが、非常に感動して涙をこぼしながら、思わず合掌して一語一語を現代語に訳していきました。

訳書のあとがきに、「余裕と達観の人」、こう書きました。この世を生きにくいのに、有名な法然上人のお言葉があります。そのお言葉を思い出すことに、私たちのような愚かな凡夫野人に教え諭すという、聖者の或る悲しみのようなものを感じます。

「この世を生きていくのは、念仏を唱えるように生きなさい。一人で念仏がたいのであれば、大勢で唱えなさい。自分の家でお念仏できないならば、ほかに流行して念仏しなさい。結婚して念仏を唱えられないならば、一人でいなさい。一人でだめなら、結婚して念仏を唱えなさい」このお言葉もすばらしいお言葉です。

孔子の語に「善人とともに居るのは芝蘭の室にはいったように、その芳香にむせて自分も清められる」とありますが、法然上人の言行にふれその御人格に触れた者はみな、上人の御人格から立ちのぼる芳香に清められました。彼は

学僧数千人を擁した比叡山にあって、叡山第一の秀才と言われた人でありながら、瘦せた秀才とか青白き秀才ではなかったのです。

法然上人は生涯を通じて、その言動において人に後ろ指をさされるようなことが全くありませんでした。清く正しいという言葉を使えば、法然上人こそは清く正しい生涯を全うした聖者でありました。しかしその清く正しい生涯は小川のせせらぎの清い流れではなく、大河の豊かさと深さをもった清さ正しさであつたと思うのです。

(丁)

※この稿の「聖集団」に関しては、伊藤唯真猊下の『浄土宗の成立と展開』（吉川弘文館）のご教示に拠りました。

いしまる あきこ 1935年東京都生まれ。国文学者、文芸評論家。東京大学文学部卒、同大学院人文科学研究所博士課程修了。東京経済大学名誉教授。著書に『面影びとは法然―式子内親王伝』（朝日新聞社）、『歴史に咲いた女たち―源氏の花 平家の花』（廣済堂出版）、『法然の手紙』（人文書院）、『お手紙からみる法然さま』、小説『月影の使者』（上・下）（浄土宗出版）ほか多数。

寺院紀行

世田谷区・用賀

無量寺

文・撮影／真山剛



十一面観世音菩薩が祀られている観音堂。

浄土宗寺院は全国におよそ七千か寺あり、それをまとめているのが宗教法人「浄土宗」。そして東京には四三七か寺あり、それをまとめているのが浄土宗東京教区。

今回の寺院紀行は、その東京教区の世田谷区で、用賀観音として知られる名利、無量寺を訪れた。そして高橋誠実住職は、宗教法人浄土宗に永年勤務、そして現在は浄土宗東京教区の教区長を勤めていて、浄土宗寺院を対象に仕事をされ続けている、つまり浄土宗の組織にとっても詳しい僧侶の一人である。

そのうえ、住職はこの四月七日に浄土宗大本山増上寺の御忌で、御代理導師という大役を勤められる。まさに話題満載のお寺だ。

崇鎮山観音院無量寺は文禄元（一五九二）年に、増上寺近隣の西応寺末として、現在地に創建された。現在の無量寺の立地は抜群。東急田園都市線の用賀駅から徒歩二分、首都高速用賀インターを降りて車で三分。昔ながらの商店街に最新のモールや各種施設が揃う街中で、行事や募参で訪れる檀信徒さんには

至って便利なお寺である。

住職が毎朝二時間かけて掃除する手入れの行き届いた境内に入ると正面に大きな公孫樹（いちよう）の木が。かつての参道は現在より右手で、公孫樹を左手に臨んだが、周辺の道路整備に伴い、山門が駅寄りの角地に移動、公孫樹が参道の正面に聳えることとなり、お寺のシンボルのような存在となっている。

その左手奥に立つのが観音堂。用賀観音として、近隣はもとより、現在の世田谷どころか杉並、調布、遠くは埼玉県の秩父まで広く信仰を集めた観音様である。この観音像、一説には行基作とも伝えられるが、用賀の住人、高橋六衛門尉直住が品川の浜で漁師から譲り受けた十一面観世音菩薩像。時は天正（一五七三〜九一）年間で、第四世念誉上人が寄進され観音堂を創建、安置されたという。そして、十二年に一度、午の年にご開帳され、世田谷百景にもなっている。しかし興味深いのが、この用賀観音、安置されている本尊の他に、巡行仏という小さい厨子に入ったご分身

が、一体どころか、四体も五体もあることだ。

江戸から明治にかけて無量寺の観音巡行は特に盛んで、巡行仏の一体は、一月は野良田村、二月は瀬田村、別の巡行仏は一月は祖師谷村、二月は赤堤村、とまた別の巡行仏は一月は秩父……とひっきりなしに各地各村の観音講に出向き、巡行仏を迎えた観音講では講の世話人が差配、各家庭に観音様が一泊しては次の家へと泊まり渡られたというのである。となると、ご分身が何体も必要になることに納得がいく。そして現在も多くの参拝者が訪れる十一月十八日の無量寺の十夜法要は特別で、かつては色々な露店が並ぶ村あげてのお祭り、各地の講中からは大勢の信者が来寺、泊まり込みで念仏講が勤められた。

無量寺の用賀観音は今でこそ巡行がなくなったが、特別な観音様講なので、それを詠んだ「無量寺の御詠歌」を巻頭カラー頁に載せてあるので、ご覧下さい。

そして時は下り昭和四十一年、観音堂で一枚の仏画が発見された。さかまく波濤の中に

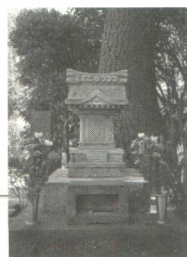
漂う巨大な老松の流木の上にお立ちになる観音菩薩の姿が描かれた絵で、明治初年の作というから観音巡行盛んなりし頃のものだ。この絵像を本尊にした朽木観音堂、といっても石塔に近いお堂だが、を建立したのが現住職の祖父、第二十九世空譽真成住職だ。

真成住職は、世田谷区役所に勤務、町会長を四半世紀務め、また毎月積立をした檀信徒をバス二台で一泊二日の団体参拝に連れていった行動派で、事前に行く先を必ず自家用車で下見されたという。そしてこの団体参拝旅行、三十年近く続けられ、東北地方から中部地方まで一泊二日の行程でいける観光地はほとんど訪れたという。そして、その下見のドライブが元となり、朽木観音堂が建てられている。お堂の台座の横に「日本百観音ドライブ巡拝成満記念」と彫られているのだ。

用賀観音が祀られる観音堂とは一味、いや二味違う観音堂である。

さて、この真成住職の車好きの血が流れているのが、無量寺第三十一世、高橋誠実住職

朽木観音堂は石塔に近く、その由来からか車庫脇に立っている。



である。高橋住職は昭和二十九年生まれ、地元の小中学校から都立深沢高校、そして大正大学へ。大学では浄土学を専攻、すんなりとお坊さんの道へ歩んでいた。とはいえ、当時の檀信徒は現在の半分、都庁勤めの父であり副住職だった先代もいるので、お寺の仕事や法務の手は足りている。

こうした状況を見て、高橋住職は一般企業への就職活動をする。そして見事アメリカ車の販売会社に内定する。会社は好青年がきた、将来有望な営業マンと期待を寄せていたが、先々代がこの就職に反対、急遽、浄土宗の宗務庁へ務めることとなる。

高橋住職が当時をこう振り返る。

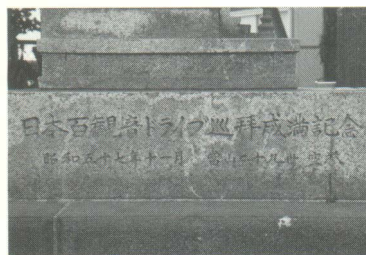
「本当に急な話で、普通は四月一日から入るところ、四月二日付で入りました。当時は京都にある宗務庁の支所だった頃で、突然の入所ですから仕事もなく、一年以上資料整理にあたりました」

アメ車を売りまくる予定が古い書類との睨めっこになってしまった。

「埃だらけの部屋で全国の寺院番号の引き合わせ、宗の要綱や規則の整理をしました。おかげで色々なことを覚ええました。資料整理が終わると、当時六、七人いた職員のお手伝いで雑務一般、何でもしました」

今でこそ浄土宗はひとつだが、かつては二派に分裂していた時代があったとのこと。それが合併されたものの、全国の寺院番号が合併前のもので未整理だったそう。毎日の仕事で自然と全国の寺院や住職名を覚えてしまう。また、浄土宗の要綱や規則の整理や各課の仕事を手伝う中で、浄土宗の組織や仕組の議会、個々の寺院レベルの申請項目や登録事項、浄土宗僧侶の僧階や各種規定など、それこそ浄土宗と寺院に関わるあらゆる知識が身につくことになる。

その後、支所が東京事務所に格上げされ、出版事業協会から出版室になった部署で今度は『浄土宗新聞』の拡販に携わる。ちなみに『浄土宗新聞』とは浄土宗の檀信徒向けの新聞で、浄土宗から各寺院の住職の手を経て檀



朽木観音堂の「日本百観音ドライブ巡拝成満記念」と銘には先々代の想いがこめられている。

信徒に配られる月一回のタブロイド版の新聞である。内容は浄土宗からのメッセージや、全国の浄土宗寺院の行事、檀信徒が登場する企画欄など様々だ。

そして配属早々、当時四万八千部だった部数を十萬部に拡販するキャンペーンの現場責任者となる。当時の出版室の上司は元産経新聞の文化面担当者だった兵庫県の僧侶で、「血縁を頼りに足で稼げ」の一言を受け、東奔西走の日々となる。

「全国各地で行われる浄土宗僧侶の会議に足を運びました。簡単に言えば行商です(笑)。出版室の本や新聞を持って行って、会場で販売、新聞のキャンペーンチラシを手渡しする。担当者が十数人いましたが、みんなで手分けして全国を行商しました」。そして、見事に三年も経たずに目標を達成したのだが、「その時に各地で受けたご恩は今も心にしっかりと残っていて、それが現在の自分に活かされています」という。さらに特筆すべきは女子高校生をモデルに起用したポスター制作だ。若

い人にもお寺は門を開いています」というイメージアップを狙ったポスターが評判になり、三大新聞でも取り上げられたという。

こうして宗務庁に二十四年勤務。退職した二年後には浄土宗東京教区の教区会議員となる。教区会議員とは東京教区を構成する十の組(芝、城南、城西、豊島、江東、浅草、城北、北部、玉川、八王子)から一人ないし二人選ばれる議員だそうで、教区の議決機関である教区議会の構成員となるそうだ。

ここで宗務庁時代の知識と経験が活き、議会の議長という大役に、その後は浄土宗東京教区のトップである教区長となった。ちなみに就任期間は一期四年で、現在教区長三年目を迎えているという。

ここで簡単に浄土宗の組織を見てみよう。まず、一つのお寺がある。そのお寺が近くのお寺と一緒に「部」を作る、そして部が集まり「組」を作る。そして組が集まり「教区」となる。これがほぼ県単位となるそうだ。そして教区が集まり、「教化センター」

左手100メートルに用賀駅、右手100メートルに無量寺。抜群のロケーションだ。



となり、最後に「浄土宗」となるという。

そしてこの浄土宗が、全国の寺院を包括する宗教法人となり、その運営組織が「浄土宗宗務庁」になるのだ。これに総本山の知恩院、増上寺などの七つの大本山が加わってくる。

そして高橋住職が勤める教区には運営組織としての教務所があり、宗務庁の窓口でもあり、教区内の行事主催や各種団体をまとめる役などを行っている。ちなみに各種団体とは青年会、婦人会、詠唱会、児童教化連盟などだそうだ。

そして今一番の教区の大きな行事は浄土宗開宗八百五十年に向けての行事だという。

「今年の増上寺の御忌で御代理導師を務めさせていただく事になりました。御忌とは浄土宗を開かれた法然上人への報恩謝徳を表す年忌法要で、教区長の大切な役目であり、大変身の引き締まる思いでいます。」

一方、浄土宗、とりわけ東京教区としては、日々激しく変わる社会システムや信仰形態の変化の中で、法然上人の教えを受け継ぐ私た

ち浄土宗寺院がしつかりその教えを伝道していくことができるか。五十年前の開宗八百年の右肩上がりの時代とは大きく変わる現在、将来を見据えて今やるべきことが見えにくい時代ですがこれに取り組んでいくためのサポートが教区の役割です」

東京教区の果たしている役割や活動を記す誌面はないが、東京という日本の中心の教区は注目され、また果たすべき役割も大きい。

「東京の寺院で増える檀信徒の多くは地方出身者で、地方の菩提寺が浄土宗の良さを伝えてくれたからこそ、東京でも浄土宗寺院と縁を結んでくれるのです。地方への恩返しの一環、ここから東京教区は始めなければならぬのでしょ」

高橋住職が最後に強調したこの言葉こそ、全国の浄土宗に、そして浄土宗の組織に長く、そして深く関わってきたからこその一言。落ち着いた語り口に、その思いを確信しながら用賀観音無量寺を後にした。(ルポライター)

名 和 清 隆



微

風

吹

動

沖つ風吹けばまたたく蠟の灯に
しづく散るなり江の島の洞

(与謝野晶子)

「微風吹動」、3人によるリレー方式での連載。今回、初めて登場させて頂きます名和清隆なわせいりゅうと申します。何とぞよろしく願います。初登場なので先ずは自己紹介を。

私は埼玉県桶川市という埼玉県中部、江戸時代に整備された中山道の宿場町（桶川宿）の街道沿にある、浄念寺という寺院の次男として生まれ育ちました。次男ですので、寺を継ぐ予定ではなかったのですが、（まあ色々ありまして）結局この町をこれまで一度も離れぬまま、現在は生家でもある寺院の副住職をさせて頂いております。

私の生まれ育った埼玉といいますが、「ダサいたま」。最近では「都道府県魅力度ランキング2018」において、43位と堂々ワースト5に名を連ねています。東京への通勤通学に便利、坂道が少ないなど、住むには良い場所ではないかと思っておりますが、長きにわたってパツとしないイメージがあるのは、もしかしたら「海なし県」から連想される垢抜けないイメージと関係するかもしれません。

「海なし県」に住む埼玉県民は、むろん私も含め海に対する憧れは強烈なものがあります。

私の母の実家は神奈川県小田原市国府津という海辺の街

にある浄土宗の寺院で、私は小さい頃から親に連れられ母の実家に遊びに行きました。遊びに行く際には必ず海岸線へと散歩に行くのですが、相模湾からは、左手に房総半島、右手に真鶴岬を望み、そして正面の水平線には大島が浮かんでいます。海の向こうにうつすらと見える、行ったことのない島の情景に思いを馳せるとともに、「あの島の遥か向こうには、アメリカがあるのかなー」などと空想に胸を膨らませながら、海に向かって石を投げたものです。（後に、アメリカの方向は全く違うということに気が付き、愕然とするのですが。）

私にとって海とはまさに、心躍る異界への窓なのです。

小田原の海のほかに、私が好きな海の風景があります。それは江の島です。弁天橋を渡り江の島に渡ると、弁財天仲見世通りが出迎えてくれ、食べ歩きをしながら階段を登り頂上を目指します。20分ほど汗をかきながら歩き頂上に着くと、そこには展望台「江の島シーキャンドル」が聳え立っています。苦勞して登った末に見る展望台からの眺望

の絶景たるや！

この江の島は、信仰の島でもあります。古くは弘法大師空海、源頼朝からも厚い崇敬を受けたといい、島にある江島神社は三姉妹の女神のほか、日本三大弁財天である妙音弁財天も祀られています。いわば島全体が神仏の住まう場所とされている聖地です。伝承によると、様々な悪事を働いていた5つの頭を持つ龍が、江の島を作った天女（後に弁財天と同一視）に恋をして求婚をします。しかし、天女が五頭龍に出した結婚の条件とは、改心して地域の人々の守護神となることでした。結果、五頭龍は改心して天女と結婚し、末永く人々の守護神となっていたとのことでした。

この伝承の発祥とされるのが、江の島にある岩屋という洞窟です。波の浸食により形成させた第一岩屋（奥行152メートル）、第二岩屋（奥行56メートル）があり、弘法大師が訪れた際には天女が姿を現し、源頼朝が戦勝祈願に訪れたとの伝承を持つ聖地の中の聖地と言えましょう。さらに、この洞窟は遥か離れた富士山にある洞窟にまで通じているという言い伝えを持っているのです。霊峰富士との接合を持つこの伝承は、如何にこの洞窟が畏敬の念をもつ

て人々から祀られていたかの表れと言えるでしょう。

冒頭に紹介した歌は、与謝野晶子（1878～1942）が1911（明治44）年に詠んだ歌で、現在でも岩屋に歌碑があります。

沖つ風吹けば またたく 蠟の灯に

しづく散るなり 江の島の洞

岩屋洞窟を訪れた与謝野晶子が蠟燭の灯りを頼りに進んでいる際、天井から雫が垂れてきたという場面を歌ったものです。

風に「またたく」蠟燭の灯りという表現からは、洞窟を進む晶子の心の高揚感とわずかばかりの恐怖心、そして神仏という大いなる存在に対する畏敬の念が感じられます。もしかしたら晶子は、洞窟の奥から吹く焰を揺らす微かな風に、遙かなる富士、また人を超えた存在を感じたのかも、と想像してしまいます。だからこそ彼女は、不意に落ちてきた雫に心動かされ歌に詠んだのではないでしょう。

「微風吹動」

心躍らせる風、心鎮める風、心を打ちひしぐ風、風には様々な心的変化を呼び起こす作用があります。洞窟の奥から吹いてくる風は、覗くことのできない穴の向こうの世界を想起させます。穴の向こうには、何が広がっていて、どのような物語が繰り広げられているのか。心を震わせ、未知なる存在や人を超えた存在と接合させる風です。

極楽の世界で吹く風は、どのような風なのでしょうか。

付記

今号で歌を引用させていただいた歌人、与謝野晶子氏は、50才代の頃、『浄土』において和歌の選者を務めていたそうです。また、私の母方の祖父である故・村瀬秀雄（文中で登場した小田原市国府津常念寺の前住職）は、長きにわたって『浄土』の編集を担当しておりました。今回は、このような縁を大切に思い、紹介させていただきました。

法と然上人 親鸞聖人

【連載二十】

親鸞聖人が捉えた
阿弥陀仏と極樂浄土②

林田 康順

(大正大学教授)

弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり

前回、親鸞聖人にとつての真実の仏・仏土とは、どこまでも私たち衆生が想念できる「いろ」や「かたち」あるいは「ころ」や「ことば」の滅した「光明」そのものであることを紹介しました。さらに親鸞聖人は、八十五歳以降の最晩年の信仰の中で編まれた『正像末和讃』「自然じねん法ほ爾章」において、阿弥陀仏の理解をめぐって次のように述べられます。

「自然」といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんとはからはせたまひたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもはぬを、自然とは申すぞとききて候ふ。ちかひのやうは、「無上仏にならしめん」と誓ひたまへるなり。無上仏と申すは、かたちもなくします。かたちもましまさぬゆゑに、自

然とは申すなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききならひて候ふ。弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり。（真宗聖典六二一―六二二）

（試訳）「自然」というのは、もとよりそのようにあらしめるという意味の言葉です。阿弥陀仏の本願は、もとより行者のはからいではなく、南無阿弥陀仏の教えを信じ頼りとする者を極楽浄土に迎えようと働いて下さっているのですから、行者が善いとか悪いとか思いはからうことがないのを「自然」というと聞き及んでいます。この本願とは、すべての衆生を「最高の仏にならせよう」とお誓いになられているのです。最高の仏とは、形を超えたものであり、形を超えているからこそ「自然」というのです。形があると示されているときは、この上ない悟りとは申しません。形を超えたこの上ない悟りを何とかして示し伝えようと、はじめに阿弥陀仏としてお示しになられたと聞き及んでいます。つまり、阿弥陀仏とは、こうした「自然」の働きを知らせようとする手だてに他ならないのです。）

ここで親鸞聖人は、「無上仏（最高の仏）」とは「かたちもましまさぬ」体であつて、「かたちまします」体は「無上涅槃（最高の悟り）」とは言えないと述べた上で、「弥陀仏」は「かたちもましまさぬ」「自然のやうをしらせんれう」であると主張されます。親鸞聖人によるこうした言い回しからは、法蔵説話に基づく阿弥陀仏は「自然」の尊さに辿り着くための前段階の方便であり、入門的な説示として位置づけられることとなるのでしょう。

親鸞聖人が多用される「自然」を「しぜん」と読む場合は、人工の対義語として、山や川、草木など、人の手がいっさい加わらないものを指します。一方、「じねん」と読む場

合は、そうした「しぜん」を生み出す働きを指します。法然上人が「炎は空にのほり、水はくんだりさまにながる。菓子のかきに、すき物あり、あまき物あり。これはみな法爾の道理なり（試訳）炎は空に向かつて燃え上がり、水は低い方へ流れていきます。果物にも酸っぱいものもあれば甘いものもあります。こうしたことは、皆、あるがままの自然のことわりなのです」（「つねに仰せられける御詞」昭法全四九三）と仰っているように、「炎は上へ、水は下へ」という働きこそ自然と言えるでしょう。

儒教思想で尊ばれる五常など、人としての道を実践するような「人為」を、老莊思想では「偽」として嫌い斥け、「人為」を排した「自然」を尊びます。『無量寿経』には、「自然」の語を五十六箇所も見出すことができ、老莊思想からの影響が広く指摘されています。親鸞聖人による「自然」の理解も、こうした流れを受けたものと捉えられ、だからこそ私たちが修める念仏行や私たちが具える三心など一切の人為を排した境地こそ最上であり、それを絶対他力と呼ぶ由縁です。これまで縷々述べてきたような有相の阿弥陀仏と有相の極楽浄土の存在を方便化身・方便化土に位置づける親鸞聖人の思想は、最晩年の「はじめに弥陀仏とぞききならひて候ふ」、「弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり」という一連の表現に帰結するのです。

久遠実成阿弥陀仏

このように法蔵説話に違和感を抱かれたであろう親鸞聖人は、『浄土和讃』の中、『無量寿経』の功德を讃える「大経讃」において次のように歌われます。

弥陀成仏のこのかたは いまに十劫ときたれど 塵点久遠劫よりも ひさしき仏と

みえたまふ（真宗聖典五六六）

（試訳） 阿弥陀仏が成仏を遂げられてから、すでに十劫の時を経ていると説かれますが、実は遠い遙かな過去よりも、さらに久しい過去世から仏として成仏しておられるのです。

ここで親鸞聖人は、『無量寿経』説示の根本となる十劫正覚の阿弥陀仏を放棄されます。さらに親鸞聖人は、『浄土和讃』『諸経讃』において次のように歌われます。

無明の大夜をあはれみて 法身の光輪きはもなく 無碍光仏としめしてぞ 安養界に影現する 久遠実成阿弥陀仏 五濁の凡愚をあはれみて 釈迦牟尼仏としめしてぞ 迦耶城には 応現する（真宗聖典五七二）

（試訳） 無明煩惱の長い闇に迷い続ける衆生を哀れんで、法身から放たれた救いの働きを具えた光明はどこまでも果てしなく行き渡り、何ものにも妨げられない無礙光を具えた仏として極楽浄土に現れ出られたのです。はかり知ることのできない無始の彼方から仏であられた阿弥陀仏は、五つの濁りに満ちた世の愚かな凡夫を哀れんで、釈迦牟尼仏としてそのお姿をブツダガヤに現れ出されました。

ここで親鸞聖人は、前号で紹介した『唯信鈔文意』の説示同様、法身から現出したのが阿弥陀仏（無碍光仏）であり、だからこそ阿弥陀仏は「久遠実成」であると述べられます。さらに親鸞聖人は、その阿弥陀仏が、自身の働きを知らしめるために釈尊として応現されているとも述べられ、『無上仏（法身）↓阿弥陀仏・無碍光仏（報身）↓釈尊（応身）』という関係性を提示されるのです。

久遠の弥陀

ここで親鸞聖人が用いられる久遠実成という言葉は、『法華経』寿量品の「われは実、成仏してよりこのかた、久遠たることかくのごとし」（正蔵九・四二下）という一節に遡ります。すなわち、ブツダガヤの地ではじめて成仏されたとする釈尊を迹門と位置づけ、永遠の過去から仏として常住され（久遠実成）、衆生に教化を及ぼし続けている釈尊を本門とする考え方で、親鸞聖人が学ばれた天台宗では基本的な捉え方です。

『四十八卷伝』卷第二十九には、法然上人の門弟である幸西が提唱した一念義について、「浄土の法門を、元習える天台宗に引き入れて、迹門の弥陀・本門の弥陀という事を立てて、『十劫正覚といえるは、迹門の弥陀なり。本門の弥陀は、無始本覚の如来なるが故に、我等所具の仏性とまったく差異なし。この謂われを聞く一念に事足りぬ。多念の遍数、甚だ無益なり』」と言って、『一念義』という事を自立しける（試訳 浄土宗の教えを以前学んだ天台宗の教えに取り込んで、迹門の弥陀・本門の弥陀という二門を立てて『十劫の昔に悟りを開かれた阿弥陀仏は迹門の弥陀である。本門の弥陀は永劫の昔から本覚の仏であるから、我々が本来具えている仏性と全く異なるところはない。この謂われを聞いて称えた一遍の念仏によって成仏を遂げる。それ故、念仏を多く称えることは全く無益である』と主張して、自ら一念義という教えを立てました）（浄土宗聖典六・四五三）と、天台宗の本迹二門の捉え方を取り込んだ幸西が、『無量寿経』に説かれる十劫正覚の阿弥陀仏は方便の仏であり、無始無終の久遠実成の阿弥陀仏こそ真実の仏であると主張していたことが紹介されており、こうした説示は親鸞聖人の説示に近似していることが知られます。

大乘仏教が興起して「浄土三部經」をはじめ、「般若經」「法華經」「華嚴經」など多数の大乗經典が成立する中、それこそ無数のバリエーションをもつ仏が説示されます。その後、そうした仏を分類・整理していく仏身論がさまざまに提示され、法身・報身・応身（化身）のいわゆる三身論が広く受け容れられ、無数のバリエーションをもった仏をなかば強引にこの三身論の範疇にあてはめていくこととなります。便宜上、この三身論の分類でいえば、今から二千五百年前に三十五歳で悟りを開き、布教・伝道の後、八十歳で入滅された釈尊のような有始有終の仏身が応身（化身）となります。また、真如法性・第一義空など多様に表現され、過去・現在・未来の三世を変わらずに貫き続けている無始無終の仏身が法身となります。さらに、衆生救済のために菩薩がそれぞれ誓願（別願）を立て、その成就を目指して修めた行に報いて成仏を遂げ、未来永劫にわたって個別具体的な下化衆生の救済活動をされ続ける有始無終の仏身が報身となります。

真宗教学においてはともあれ、親鸞聖人がいう「久遠実成阿弥陀仏」は、ここでいう三身論の範疇にあてはめれば明らかに法身に分類されることでしょう。親鸞聖人の捉える阿弥陀仏が法身である以上、親鸞聖人が仰るように、一人ひとりの凡夫が個別具体的に発する六識作用によっては到底認識し得ない、「こころ」や「ことば」の及ばない仏となり、あるいは、個別具体的な事情に合わせて救済活動を施すことはなされない仏として位置づけられるのは至極当然の結論なのです。

（続く）

江戸の川 を歩く

第二十八回

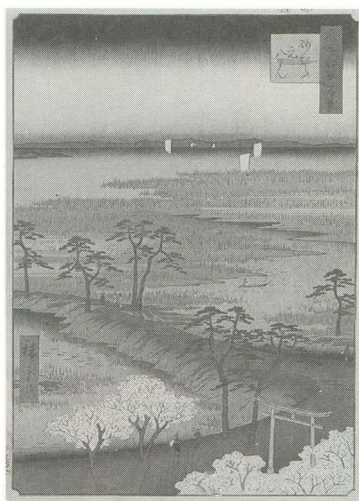
江戸ウォーカー

森清鑑

木材は、この川を通して木場まで運ばれることになる。

州崎弁天から中川へ

深川から中川に向かって歩いてみよう。深川木場、下端に位置する、海沿いの埋め立て地、州崎。その東端にあるのが参詣を兼ねた人気スポット、州崎弁天。ここから海沿いを東に歩く。その景色は正に風光明媚。右を見れば、茫洋とした江戸湾が広がり、遠くに富士が聳えている。周囲は、砂村新田が広がり、そこら中、水流がある、のどかで何とも自然な田園風景。ハイキングに最適である。そのまま、まっすぐ行けば中川である。中川の河口部は、広々とした海の入江の感。ちょっとした手を左、つまり北に曲がる。沼地に盛り上がった土手道。両側に松の木。それが桜並木に変わる。神社の鳥居が見える。そこが元八幡社。北から来る参詣者は、小名木川を南に下り、左に曲がると、分脈の砂村川。川沿いに土手道。東に歩くと、程



広重：「砂村もと八まん」：広重は江戸湾に向かって辺りの風景を捉えている

なく桜並木が見える。ここも埋め立て地、砂村新田に盛り上がった土手道。独特の景観である。道のどこからでもすばらしい景観が拝める。かくてこの辺りは、江戸っ子垂涎の景勝地となった。

元八幡社

広重の絵は、この景勝地の姿を見事に捉えている。遠く江戸湾に帆掛け船が浮かんでいる。周囲は緑の埋め立て地。そこに入り組んだ川に猪牙船

を漕ぐ船頭の姿。人々は立ち止まっては美しい景観を飽かず眺めている。この道は、松並木に囲まれているので日影にもなり迷いようがない。神社周辺は桜の名所としても有名。広重は、元八幡の存在を鳥居のみで表現している。

他方、雪旦は、江戸名所図会で「砂村富岡元八幡宮」と題し、神社の様子をリアルに描いている。描かれている鳥居の前の土手道は、江戸湾沿いから来た道。元八幡は簡素な神殿を持ち、四方に、弁天、水神が祭られ、所々に休憩所を設け、周囲の自然に溶け込む神聖な別天地の感。鳥居の前の土手道には水が押し寄せており、蘆が丹念に描かれている。「この辺り、夫竹多し」。

元八幡社は簡素だが由緒ある社である。源頼政や太田道灌も崇拝。江戸になって、洪水の危険もあり、ご神体は深川に移転される。これが富岡八幡の始まり。つまり、深川八幡として、今日まで江戸っ子の崇拝を集めている。その後は、辺りの埋め立て地造成の責任者、砂村新左衛門が勧請し、神殿は昔の姿のまま維持保存された。したがって、

江戸っ子は元八幡社と呼んだ。富岡八幡からここまで参詣を兼ねて、辺りの風光明媚な景色を楽しんだ江戸っ子も多数いたことであろう。

中川河口から北上

元八幡社から中川河口に出ると、そこは、広い海之感であつたろう。左を見ると船越村の島が突き出ており、その先端部から右へと宇喜多川が田園を潤している。つまりこの川は江戸川の方に流れており、ここもすばらしい水の景観を現出。目の前の中川を北上する。

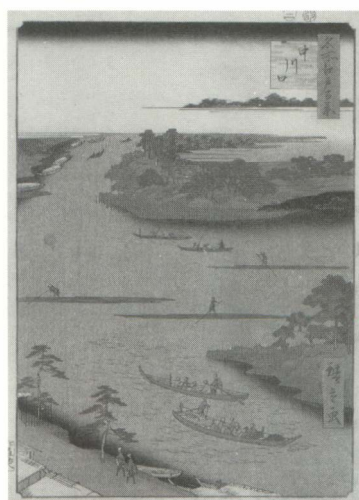
左手は八郎右衛門新田が延々と続く。自然の耕地の景観。この新田が終わると、小名木川からの分流、境川が



雪旦：江戸名所図会：砂村富岡元八幡：絵の左は深川方面。

流れ込んでゐる。そこから中田新田、太郎兵衛新田と続く。滔々たる流れの対岸は船越村の田畑。すると間もなく、左から小名木川が流入してくる。左、斜向かいに中川御関所が見える。これは、川の関所である。舟の往来が激しく、積み荷物資を検閲しているのである。広重は小名木川、中川番所の方からこの光景を描いている。絵の中央に描かれているのが中川。川並が木材を筏状に組んで頻繁に往来している姿。中川を対岸に渡るためには舟を使う。橋は無い。ここを「番所渡し」といい、運搬船は頻繁に出ている。渡ると船堀川（行徳川）で、家康が有名な行徳の塩を江戸に入れるために開削した最初の運河となる。広重はこの船荷運搬の、交通の要衝を小名木川から「中川口」に向かつて巧みに描いているのである。

左に中川番所を見て、舟をさらに北上させる。左右の景色は田が果てしなく広がっている田園風景。左、小名木村から亀戸村に。右、西小松川村。まもなく、堅川河口に出る。堅川は、小名木川に次いで開削された隅田川と中川を東西に結び運



広重：中川口、中川番所：絵の中央が中川、対岸の船越川。

河。次第に、中川から堅川を通じ、猿江材木蔵へ。そこから南十間川を下り、海沿いの木場へと材木を運ぶ輸送が常態化する。堅川口を見ると、田の中に浅間社亀戸富士が聳えている。この辺り、川の中央に大きな中州があり、蘆が生え、生物の宝庫。高貝州という。ここにも渡しがあり、これを「逆井の渡し」という。舟が対岸へと繋いでいる。そして左側には、亀戸村の田が広がり、右側は、逆井村の田園風景。この辺りはすばらしい水郷の景色である。ここから中川は、やや左へと蛇行。

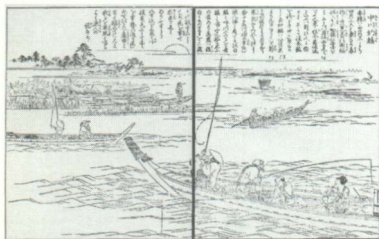
中川の漁場

このように肥沃な土地を縫って流れる中川に魚

すると右手に、浅間社の逆井富士が立ち、側に白髭明神社の社が見える。すると右岸に、防風林が連なっている。これが途切れると、左から、北十間川が入り込む（本所から流れてくる運河）。過ぎると、中川は右へと蛇行する。まもなく、「平井の渡し場」。右岸に椿で有名な平井聖天燈明寺、諏訪社、四所明神、妙光寺が並ぶ。平井聖天の規模は大きく、その鳥居は中川に向かって立つ。鳥居を潜ると両側に茶店が並び、小高い丘を巻くように参道があり、四方枿に山門、不動堂が建つ。ここは、椿の名所。丘の上に立つと眼下に中川が滔々と流れている景観。「平井の渡し場」から舟に乗って鳥居を潜る参詣客が圧倒的に多く、渡しが設けられている次第。この辺り、余程、美しい水の光景だったのだろう。雪旦は描く。この後、中川は大きく蛇行を繰り返しながら北上していく。



江戸名所図会「平井聖天宮」：絵の下、滔々と流れる中川、平井の渡しと乗客を乗せた渡し船。



雪旦：江戸名所図会：中川釣り鱸

がないわけがない。ましてや、江戸湾の魚が汽水域に入ってくる。雪旦の絵は、中川が有数の漁場であることを示している。「春鱸は三月末から四月にかけて盛んなり」。何艘もの魚釣り舟が出ている。釣り糸をたれている者、餌を換えている者、キセルを口に、辺りの風景を眺めている者。彼は船頭であろうか。彼の前には、暖かい飲み物が用意されている。甘酒であろうか。これが春釣りの光景である。遠くに帆掛け船が見える。江戸湾である。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十六回

第三部

充実と稔りの白秋へ

愛弟子・長谷川良信と社会事業



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリア人ハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。またヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカ存在を知って強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、残された海旭は母トナと導きの師・海定逝去の悲報に耐えながら博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへドイツ駐劄大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合った満蒙の外交官・北条大洋と再会、大アジア主義に共感。十一年ぶりに祖国の土を踏むと「大逆事件」に遭遇。今後の身の処し方を思索するなか高島米峰の依頼で「新仏教」に創作童話「釣龍節」を発表。留学時代から温めていた細民支援の「浄土宗労働共済会」を立ち上げ、洲崎大火と米高騰で苦しむ彼らの救済へ乗り出す。教え子の宗教大生も外米格安販売で参加、大反響を呼ぶ。

宗大生の「善行」に東京市長が「慰労会」

渡辺海旭が住職をつとめる西光寺の寄宿生の宗教大生が中心になって始められた、米価高騰に苦しむ「細民」への外米格安販売は、新聞各紙に紹介されて、大きな社会的な反響をよんだ。それにより、学僧の卵たちの「善行」に、各方面から数多くの称賛が寄せられ、ついには、これに感動した東京市長の肝いりで盛大なる「慰労会」までが開催されることになった。おかげで宗門としては大いに面目を施したが、師である海旭には、それよりも大きな果実を得ることができた。海旭がドイツから帰国するなり取りかかった「社会事業」のよき後継者を早くも発掘できたことであった。

その後継者とは、外米格安販売の「企画立案者」の長谷川良信である。

ある夜、勤行を終えた海旭は、寄宿者の良信を書斎に呼び寄せて、こんなやりとりを交わした。

「は、長谷川くん。東京市長に慰労をされて、ど、どうかね」とさぐりを入れた海旭は、教え子の反応に内心で欣快をおぼえた。

「たしかに名誉ではありますが、それよりも、わたしにとってなよりの成果は、先生がかねてからおっしゃっている、現下の仏教徒にとって社会事業がいかに重要かを身をもって体験できたことです」

「そ、そうか、そうか」と海旭は笑みを浮かべると大きく頷いた。「どうやら、きみは学僧よりも実践家にむいているらしい。若いのに世俗の人々の機微に通じている。あれには感心させられたよ」

と言って、海旭が教え子たちの外米格安販売で目撃した、こんなエピソードを引き合いに出した。

格安の外米も買えない困窮者も

海旭が会場の両国回向院についたのは、販売開始時刻の夕方五時少し前だったが、当時

の相場である一升二十一銭の外米が十六銭で販売されるという情報を聞きつけてか、すでに定刻の一時間も前から長蛇の列ができていた。金持ちの買い占めや利ザヤ稼ぎの転売を予防するために「一人三升まで」とされていたが、押し寄せたなかには、一升分の金の持ち合わせすらない困窮者もいた。

米の山を目の前にして、職人風の男が失望の声をもらした。

「朝からエンヤコラをやって二十銭稼いだんだが、借金をけえしたら手元に残ったのは十二銭。昼に腹が減ったんで、がまんできずに豆餅を食っちゃったから八銭しかねえ。今晚、久しぶりにカカアとガキに白いオマンマを食わせられると思ったのに……」

と、そのすぐ後ろで中年の内儀風がため息まじりに言った。

「あらまあどうしょう。あたしも長屋で、お隣りさんからとりあえず四銭を借りてきたんだけど、売ってもらえないのかい」

庶務係として売り子たちを束ねていた長谷川良信は、これを聞きつけると、すかさず列に向かったこう呼びかけた。

「他にも一升分十六銭の持ち合わせのない方はいらっしゃいますか」

応じた客を呼びよせると、

「御三方の手持ちをあわせて一升ということ。それぞれの金額分にあわせて米は小分けして差上げますから」

と話をまとめた上で、某有力寺より寄付された阿訶陀薬一包をそれぞれ「おまけ」で付けてやると、三人は「ありがたや」と手を合わせて受け取っていった。

しかし、海旭のみるところ、長谷川は米を巧みに売りさばくだけの「商売上手」ではなかった。客の窮状の程度をしっかりと観察していて、家や仕事を失って困っているらしいとわかると、

「一泊二銭で泊られます。風呂も食事もあります。仕事も紹介しますから、どうですか」

と海旭が立ち上げたばかりの浄土宗労働共済会への入所を誘うことを忘れなかった。

「へえ、そんなありがたいところがあるのかい。だったら、さっそくお世話になろうか」と応じる困窮者も何人かいた。

この光景をみて、海旭はおどろきと感動をおぼえながら、長谷川良信には社会事業家としての優れた資質があると直感。そしてそれは間違っていないかった。

後に長谷川は、周辺の人々はおそれて寄り付かない西巢鴨のスラム街「二百軒長屋」に



宗教大学在学中の長谷川良信(右)。
左は兄の善治。大正3年頃。
長谷川匡俊「シリーズ福祉に生きる24
長谷川良信」(大空社)より

住みついてセツルメント活動を展開、子供たちに勉強を教えて親たちの信頼を得て、ついにはイヌも食わない夫婦喧嘩の仲裁まで頼まれるようになるのである。

宗教は「パンの問題」を解決する先導役に

海旭から外米格安販売のエピソードを引き合いに出されて、長谷川良信は照れ隠しに頭をかいて答えた。

「あの程度のことです、先生にはめられるとは光栄ではありますが、なんとも汗顔のいたります。キリストは『人はパンのみにて生きるに能わず』と言ったとされます。これは仏教だけでなく、まともな宗教の存在理由とされています。しかし、先生はこう言われました。『人はパンのみにて生きるに能わず』時代なのだ、だから宗教は『パンの問題』を解決する先導役にならねばならぬ、と。まさにパンならぬコメを売ることで、そのことをつくづく感得しました」

そこで長谷川良信は、一息入れると、身を乗り出した。

「海旭先生はこうも言われました。『仏教は社会宗教でなければならぬ、社会事業こそ現在の仏教学徒にとって最善で最要の任務である』と。しかし、今回の外米販売で、わたしはほんの序ノ口にたったにすぎません。先生の教えをさらにきわめていききたいと思います」

海旭は大きく頷いた。目の前の教え子には社会事業家としての資質があるとの直感は今や確信に変わっていた。海旭は教え子の手をとった。

「そ、そうか。長谷川くん、きみには、ぜひとも、その道をきわめてほしい。日本には救済を待っている細民がたくさんいる。そして、数はすくなくがかれら細民と共に生きんとしている篤志の同志がいる。どうだ、来年の夏季休暇には全国行脚をして、それをきみ自身の目と身体でしっかりと受け止めてみないか。ば、ばくができるかぎりの手配をしておく。われ

らが社会事業こそ、百聞は一見にしかずだ」

師弟愛の精髓、ここに極まれり

それは一年後の大正三年（一九一四）の夏に実現されることとなった。長谷川良信が宗教大本科最終年の三年生の二十四歳、渡辺海旭が宗教大で教鞭をとって四年めの四十二歳のときであった。

海旭が教え子の社会事業施設視察のために段取りをつけたのは、静岡・愛知・岐阜・滋賀・大阪・兵庫・奈良・三重の八府県にわたる二百か所以上に及んだ。それだけではない、なんと宗門の機関紙である「浄土教報」の主筆の特権を思う存分に行使して、援護にこれとめたのである。

「宗教大学学生、長谷川良信、夏期休業を利用し、巡回伝道を兼ね、各地感化救済事業の実地視察を行わんとし、本月一七日帝都を出発し、東海道を下られ候。同君は拙衲と起臥

を共にする両三年、その学業の優良、操行の端肅、弁論の熾烈、事を行うの熱誠は、拙衲の親しく確証するに御座候。しかのみならず同君は数回旅行伝道の経験を重ね、自ら随機の手腕を錬磨習得され候。こいねがわくば沿道の尊宿諸上人、この前途有為の青年に充分の同情と保護を賜い、特に実際事業の視察に關しては、なにとぞ充分の便宜、御執計の程、伏して願ひ上げ奉り候。合十」

（「浄土教報」大正三年七月十七日号）

「職権乱用」といわれてもおかしくないほどの肩の入れようである。

ここ一番という場面では、人生意気に感じた海旭のなかからは、しばしば「俠客坊主」が顔をのぞかせるが、まさにこのときもそうであった。

労働共済会を立ち上げて社会事業という未知未体験の大事業に挑戦をはじめたものの、周回から「洋行帰りのお手並み拝見」と見ら

古き伝統技

三代にわたる信頼

れるなか、早くも若き後継者を見出したことが、よほどうれしかったのではないだろうか。師の熱烈な援助に、愛弟子もまたよく応えた。

長谷川良信が費やした旅行日数は五十余日。訪れた諸施設は二百か所を優に越えた。猛暑のなか、早朝から夜遅くまで寸暇を惜しんで知見の吸収につとめた。それは、さながら良質の水を前にした乾いた海綿であった。そこでの社会事業の先達たちとの出会いは、その後の良信の活動の大きな糧となる。

長谷川良信は、終生にわたって、海旭との出会いを、周囲にこう語ってやまなかった。

「自分は渡辺先生に百二十パーセントの信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)38421289

振替0018012145231

をおいていた」

かつて親鸞は「法然上人を信じたことで地獄に堕ちることになっても後悔しない」と述べたと言われるが、おそらく長谷川良信にとって渡辺海旭との出会いは、親鸞と法然の出会いと同様なものであったのではないだろうか。

長谷川良信は足かけ二か月にわたる全国視察旅行を終えて、一段と成長してもどつてきた。ここに、後に「貧民街の聖者」賀川豊彦、日本福祉大の創設者・鈴木修学とならぶ日本の三大社会事業家の一人が、渡辺海旭という産婆によって、呱呱の声を上げたのである。

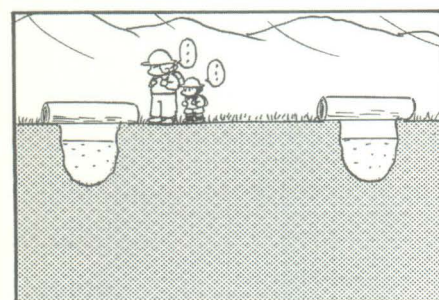
(つづく)

さっちゃんはおっ

159

かい目

かまちのよろう



かまちのよろう先生作新聞四コマ漫画『ゴンちゃん』が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

雲厚く春の見えないビルの下 岱潤

今年は寒さが一段と厳しく感じられるのは、気候だけではなく、犯罪の連鎖、SNSへの馬鹿げた投稿など、信じられないことが続くせいかもしれない。

あおり運転で事故が起きているのに、同じようなことが続く、子供へのいじめ、虐待が後を絶たず、またコンビニなどではSNSへの馬鹿げた投稿が繰り返えられる。三枚に下ろしている魚の切り身をゴミ箱に入れ、また拾って切り出した、売っているおでんを口に入れ、またはき出したり、瓶の口をなめ回したりしている動画が流れている。社会や人は信

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
蔵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉祥寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松溝泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

用で成り立っている。その信用を気づくには何年もかかるが、信用を失うのは一瞬だ。おもしろいこの意味がまるでわかっていないこの若者たちは、とてつもない代償を払うことになるだろう。

そして子供と親の問題では、実の親がどうして娘を死なすまでいじめることが出来るのか、死ぬことが想像できなかったのか、どうしても理解できない。また娘を差し出し、我が身をかばってしまう母親の母性も、理解できない。人間として常識と思われていた感情が、否定されているようで、法話での親子の話が難しくなった。親が子の犠牲になる時代は終わったようだ。

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

総じて人間の資質がどんどん墮ちている気がしてならない。深い感情を持つことも、考えることもしなくなった人間は、煮えガエルのごとく減んで行くしかない。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照恵
村田洋一

浄土

八十五巻四月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可
印刷 平成二十一年三月二十日
発行 平成二十一年四月一日

発行人 佐藤良純
編集人 加藤昌康
印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四丁目四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・五七八・六九四七
FAX 〇三・五七八・七〇三六
振替 〇〇一八・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 価額:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない

※関東版(三幸請)、関西版(四幸請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

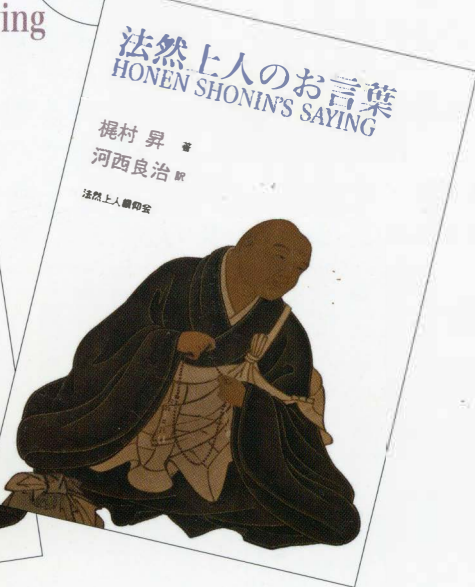
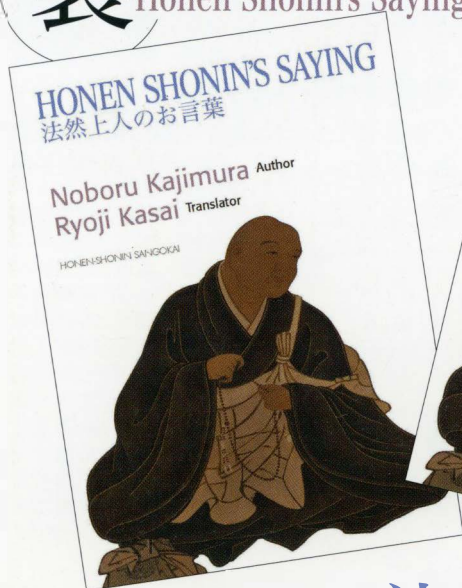
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は価額に含まれています。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏 左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表 右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。